

宮崎県都城市（国内 18 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要（令和 2 年 12 月 8 日実施）

令和 2 年 12 月 8 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は、15 例目の発生農場に隣接した農場である。山間部の河川沿いの河岸段丘上に位置し、付近は山林に囲まれ水田と畑地が隣接している。
- ② 農場から約 50m の距離に河川が流れており、約 1km、約 3km の距離にはそれぞれダム湖が存在する。12 月 3 日の調査時には、それぞれのダム湖において、水鳥類が確認された。
- ③ 当該農場にはウィンドレス鶏舎 2 棟及び開放鶏舎 3 棟があり、発生時はすべての鶏舎で、肉用鶏が平飼いで飼養されていた。発生鶏舎は、河川から最も近くに位置する開放鶏舎であった。

2 通報までの経緯

- ① 15 例目の発生に伴い、12 月 3 日に実施された周辺農場検査において、全ての鶏舎で陰性が確認されていた。
- ② 管理人によると、発生鶏舎における 1 日あたりの死亡鶏は、12 月 7 日までの過去 21 日間は 3~14 羽で推移しており、12 月 7 日に移動制限の特例として飼養鶏を食鳥処理場に出荷するために実施された検査の結果、陽性となった時点においても、鶏の異常や死亡羽数の増加は見られなかったとのこと。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場はウィンドレス鶏舎 2 棟を 1 名の従業員が、開放鶏舎 3 棟を 2 名の従業員が専属で管理を行っており、毎日、鶏舎において鶏の健康観察を行うとともに、死亡鶏の回収を行っていた。
- ② 管理人によると、従業員は基本的に専属で管理を行っている鶏舎以外では作業しないが、入雛の際には 3 名共同で作業しており、すべての従業員がいずれの鶏舎でも作業していたとのこと。ただし、最近の入雛は 1 か月以上前であった。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 管理人によると、従業員は農場専用の作業着と手袋、長靴を使用していた。また、鶏舎毎に専用の長靴と踏み込み消毒槽を設置しており、ウィンドレス鶏舎の従業員は鶏舎ごとに手袋の交換を行い、開放鶏舎の従業員は手指消毒を実施していたとのこと。
- ② 鶏舎横には飼料タンクが設置されているが、当該タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低いと考えられた。
- ③ 管理人によると、飼養鶏への給与水は、地下水をくみあげ、当該農場専用の貯水タンクにて消毒した後、各鶏舎に供給されているとのこと。
- ④ 管理人によると、死亡鶏については、15 例目の発生までは、毎日、健康観察時に回収した死亡鶏をかごに入れ、農場から約 1km の距離に設置されている、近隣の 5 農場で共有する死亡鶏冷凍保管庫に運び入れており、定期的に死亡鶏回収業者が回収に来ていたとのこと。この際、冷凍保管庫の横には車両消毒装置が設置されており、敷地に入出入りする際には車両消毒を行っていたとのこと。ただし、15 例目の発生以降は、移動制限により死亡鶏の持ち出しができなくなったため、開放鶏舎ではそれぞれの鶏舎

内に保管し、ウィンドレス鶏舎では鶏舎外に積み上げ、消石灰とブルーシートで被覆し保管していた。

- ⑤ 管理人によると、全鶏舎ほぼ同じタイミングでオールイン・オールアウトを行っており、オールアウトのたびに鶏舎内の清掃・消毒を行うとともに、鶏糞を業者に委託し、排出しているとのこと。
- ⑥ 管理人によると、普段から鶏舎周囲に消石灰を散布していたとのこと。
- ⑦ 管理人によると、車両が当該農場に出入りする際、農場の入口に設置された動力噴霧器により消毒を行っていたとのこと。
- ⑧ 開放鶏舎の左右及び奥の外壁には防鳥ネット(マス目は約2.0×2.0cm)と、さらにその外側には寒冷紗が設置されていた。発生鶏舎において、防鳥ネットの内側には、側面には金網とその外側の上部にロールカーテン、下部に跳ね上げ式の窓が設置されている。また、入口及び奥側の壁には排気用の換気扇が設置されていた。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 発生鶏舎の外側には防鳥ネットが設置されており、破損は認められなかった。
- ② 発生鶏舎の側面の金網には一部に破損が認められ、鶏舎壁面には小型の野生動物が侵入可能な3cm程度の間隙が確認された箇所があった。
- ③ 管理人によると、鶏舎内でネズミを見かけることはたまにあり、殺鼠剤の設置等のネズミ対策を行っているとのこと。
- ④ 管理人によると、農場周辺ではアナグマやイタチ等の野生の小動物及びカラスやスズメ等の野鳥が確認されることもあるが、鶏舎内で確認したことはないとのこと。